

## 唯物史観より人口史観へ（Ⅰ）

別 府 芳 雄

### はじめに

今は亡き南 亮三郎博士は、つねづね歴史の究極の動因を“人口”におく歴史観（＝人口史観）が構想されるべきことを提唱せられた。歴史の究極の動因を“人口”におき、人口問題から歴史を解明する歴史哲学がこれまでなかったからである。南先生は、最後の著作『人口論六十年』のなかで——「わたしは近年、特色的な歴史の見方が実現するのではないかと考えている。それはおそらくマルクスやエンゲルスの歴史観と隣り合わせの、しかしそれとはまったく異なった歴史観が成り立つであろう。わたしはそれを人口史観（Population Interpretation of History）と呼びたい。マルクスとエンゲルスが若いころに亡命先で構想したまま未刊行に終わった《ドイツ・イデオロギー》の一節“生の生産と再生産”（Produktion und Reproduktion des Lebens）をきっかけにマルサスの思想を取り入れて、そのうえにこれを築きたい。こうすることによって、マルクス系の経済学者や歴史家の多い日本の学界での反マルサスの空気が幾らか変わってくるかも知れない。そんなことが望まれる。

それと同時に、わたしは最後の置きみやげに“人口哲学”（Population philosophy）なるものを構想したい。殊に“人口”がさまざまな分野での探究とともに人為的政策の対象となるとき、最後の決め手となるのは“人口哲学”であろう。マルサス自身でさえ手をつけ得なかった“人口史観”

と“人口哲学”——その新世界に構想を進めていきたい」と述べられ、また『人口論五十年の後』では「近年になって私は、この語（人口哲学のこと）を用いはじめた。それは人口研究一般における総合的人口科学の基礎としての“人口哲学”である。……人口論と哲学、その結びつきはないものでしょうか。ことに今日のように人口政策の論議がさかんになると一層その必要を感じます。いわば“人口哲学”といったような新たな学問世界が開かれるように思います。しかし私の場合、日はすでに西に没しようとしています」と書かれた。

筆者は亡き恩師の遺志に応（こた）えるため恩師の提唱された“人口史観”と“人口哲学”のご提唱の理由とその必要性について、わかり易く説明すると共に、先生の人口哲学ご提唱の理由を述べてみたいと思う。

歴史哲学として考えてみると——気の毒ではあるが（素晴らしいだけに気の毒というほかはない）、唯物史観は歴史学的に未消化な不十分な歴史観であった。“歴史的構成のむろさ”をもつ歴史観であった。それは“リンゴの皮”の歴史観であった。というのは現在の世界の人口は約48億であるが、その78%はいわゆる低開発諸国といわれる国々の人口である。歴史発展の究極の動因を“種の繁殖”（人口増殖）を除外した歴史観では説明がつかなくなるからである。（その理由は順次明らかにする）。だから歴史の究極の動因を“物的生産力”でなしに、“人口”におく人口史観★（マルクスやエンゲルスの歴史観とは隣り合わせの、しかもそれとまったく異った）が樹立される必要がある。

★ 人口史観と歴史人口学（1950年ごろフランスで出現した）とは区別されなければならない。歴史人口学が経済史に与えた重要な功績は認めるが——人口史観は、歴史の究極の動因を“人口”（種の繁殖）から説明しようとする歴史哲学である。人口史観は歴史哲学であり、歴史人口学は人口から歴史を説明しようとする歴史解釈である。

筆者は『研究論集』第20号（1981年）、第21号（1982年）、第22号（1982年）において「唯物史観における生の生産および再生産」について述べた。すなわちエンゲルスは彼の晩年の著作『家族・私有財産および国家の起原』（Der Ursprung der Familie, des Privateigenthums und des Staats, 1884）〔マルクス死の翌年〕の初版の序文で、唯物史観の“新しい定式化”をおこなって以下のようにいう——「唯物論的な見解によれば、歴史における究極の決定的要因は直接的生命の生産と再生産とである。しかしこれは、それ自体さらに2とおりにわけられる。1方では、生活資料の生産すなわち衣・食・住の諸対象とそれに必要な道具の生産、他方では人間そのものの生産、すなわち種の繁殖がこれである。ある特定の歴史的時代および特定の国土の人間の生活がいとなまれる社会的諸制度は2種類の生産によって、すなわち1方では労働の、他方では家族の発展段階によって制約される」と。このエンゲルスの定式化は1859年にマルクスが『経済学批判』の「序言」で示した“唯物史観の定式”とは違う。マルクスの場合には「人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係に、すなわち、彼らの物質的生産諸力にはいる」ことになっている。このマルクスの定式には、エンゲルスが述べているような「他方では人間そのものの生産、すなわち種の繁殖〔人口増殖〕」という内容が欠如している。逆にいうと、エンゲルスの場合には、唯物史観の定式のなかに“種の繁殖”（人口増殖）という基底が補足されている。つまり晩年のエンゲルスの“新しい定式”とマルクスの『経済学批判』の「序言」の古典的定式とは内容的に違う。いいかえると、エンゲルスは晩年になってから——しかもマルクス死後、唯物史観の定式を勝手に拡張解釈（あるいは補足修正）したということになる。そこで唯物史観における“生の生産の2重性”（Doppelcharacter der Produktion des Lebens）の意味をめぐって、さまざまな論議が生れたことはすでに述べた。要するに、この事実は、マルクスとエンゲルス両人の歴史観の相違に

基因する。(マルクスとエンゲルス兩人によって、若き日に樹立されたものが唯物史観であるとする従来の見解からすると、これは奇怪なことであった)。結論的説明として、“生の生産および再生産”としてマルクス、エンゲルスたちが考えた物的生産が、“一方では労働の、他方では生殖の”といった2つの側面にまたがっていたとしても、それは同じ社会、同じ歴史に、対等の要素としてあるのではなく、人間の生殖が主役を演ずるのは労働生産力のいまだ十分に発達しないところの、したがって一般には唯物史観学説の構成範囲外にぞくするとせられる原始社会だけだということであった。——しかし考えてみると、どの社会でも労働が必要であるばかりでなく、生殖や繁殖が行われているのは“原始社会”だけには限らない。そればかりではなく、生殖や繁殖が続いてゆけばゆくほど労働の強化が必要となり、生産力が促進されてゆくのは眼前の事実である。だから「わたしたちは、この史観(唯物史観)が大きい影響力をもったことを認めるとともに、その学説に取り残されていたもう1つの歴史的決定要素に特別な注意を向ける必要」(南『人口論五十年の後』)が出てくる。ここに人口史観をめざす構想が生れる。

ところで、われわれが何を歴史の基礎とし、何を歴史の動力と考えるか、何を発展の“導きの糸”として歴史を見るか——それこそは歴史哲学の根本問題であるが、前記のエンゲルスの定式に示された彼の歴史観には、物的な生活手段とは別に、“人間種族の繁殖(=人口増加)”が述べられているのをみた。繰り返していうと、エンゲルスがモルガン(Lewis. H. Morgan)の『古代社会』(Die Urgesellschaft, 1877)を読んで修正した唯物史観では——「1方での食物の生産、他方での子孫の繁殖という根本事実が“1つの2重の関係”(ein verdoppeltes Verhaltnis)を構成するということは疑うことは出来ないと思う。それは確かに、相互につながり合った、切ろうとしても切りはなせない根本事実であった。しかし両者の関係はそれだけではない。子孫の繁殖がつづけば、前の食物の生産という面が

一層の重圧となってくる。今までは当人たちの間の仕事であったものが、こんどは繁殖した子孫のためのということになる。換言すれば、人口の増加とともに食物の生産が一層の緊急事とならざるを得ない。このところが唯物史観では見落されている」（『人口論五十年の後』）ということなのである。——とすると、種の繁殖つまり人口増殖を歴史の究極の原動力とする歴史観を晩年のエンゲルスは構想し得たものに違いない。考えてみると、経済史観、宗教史観、芸術史観、戦争史観等々とならんで「むしろ、それ以前に」人口史観が当然構想されて然るべきであった。なぜならば、歴史とは——のちに詳論するように——“現在から過去を照らし出すサーチライト（searchlight）”（G. リッター）のようなものであり、そこに照らし出される事象の特徴をどういう視点から分析考察するかによって——多様性をもつ事象の統一性のうえに、その人の歴史観が生れる。ただし予め断っておくが、「歴史は、われわれの未来を予測したり、予言したりすることを、われわれに教えるものではないということである。そんな教訓は決して歴史から学びとることができない」（A. J. トインビー）ものだということである。未来史（future history）は不可能だということである。つまり「歴史の過程を現に“成りつつある”現在から、そのまま“成らんとする”将来まで延長することは、われわれがすでに、歴史の本来の範囲外に踏み出したことを示す……。歴史を“展望的に把握する”ことは、すでに史的認識の領域外に属する」（大類 伸氏）ということである。歴史は1つの科学なのである。歴史は歴史科学（historical science）なのである。

歴史学は、“歴史的事物をその歴史性において捉える〈歴史的歴史科学〉である”（林健太郎氏）から、その分析考には歴史哲学を必要とする。われわれが何を歴史の基礎とし、何を歴史の動力と考えるか。何を発展の導きの糸として歴史を見るか——それこそが、歴史哲学の根本問題だからである。

歴史家は、つねに大衆全般に影響を与え、かつ時代の典型となるべき事

柄を取りあげる。経済史、戦争史、宗教史、美術史……などが取りあげられるのは、これらが多くの人びとの“生の側面”を取り扱うからである。いいかえると、過去との継過的関連において現在の“生”を照明するからである。「歴史と生との関係 (die Beziehung der Geschichte zum Leben) は統一の関係 (eine Beziehung der Einheit) として理解されなければならない」(クローチェ) のである。真の歴史は現代史であるから、歴史は“歴史家の魂のなかで脉打つ (vibrate in the historian's soul)”ものでなければならない(クローチェ)。ここに歴史の“本来的意義”(der eigentliche Sinn)がある。だから歴史は1つの価値をもつものであり、歴史が語る教訓はいつも人間生活に有益なものである。ここに歴史の“本来的意義”がある。

繰り返していうが、歴史家とはけっして古文書を漁り回る紙屑屋のごときものではない。また歴史とはある時点の“ひきちぎり”ではない。歴史とは、それ自体まとまった有機的全体でなければならない。歴史は“まるごとの歴史”(フーヴァル)でなければならない。

つまり、ある出来事の史料は単なる史料であって、歴史でもなんでもない。個人の伝記のごときも歴史ではない。歴史とは“特殊的なもののうちに、ある一般的なもの (general in the unique)”を求めること (E・H・カー)なのである。だから歴史とは、あらゆる個別的なものを叙述するものではなく——“本質的なものを叙述中にとり入れるもの”(リッケルト)である。これまで往々にして、これらの点〔歴史の概念〕が曖昧であった。★

★ 歴史という日本語が曖昧な概念であることは亀井勝一郎氏が『現代史の課題』(中央公論社、昭和32年)で巧く述べている。ラングロアとセニョボーもフランスで歴史を学ぶ学生たちが“コレッジで歴史の成績がよかった”からとか、“過去に心惹かれたから”とか、“歴史は比較的容易な学科だ”——要するに

歴史というものを“全く知らない”学生たちによって占められていることを驚いている。

このような歴史概念の曖昧さが哲学者をして観念と現実の混同を許してしまったのである。たとえば、“文字が発明される以前に歴史はありえなかった”とよくいわれる。歴史は文献でつくられるともいわれる。果してそうだろうか。こう断定することは、われわれの歴史研究の範囲をきびしく限定したことにならないだろうか。確かに「文字の使用は、われわれが文明と呼びたいような大半の文化の特徴を示す。しかしながら、それはすべてのものにみ出されるわけではない。たとえばスペイン人が到着する以前のペルー文化は、その一般的な性格の点でメキシコや中米にみいだされる文化、いやそれどころか、古代エジプト人の文化にさえよく似ているように思われる。だがエジプト人とアスチカ人は文字をもっておりペルー人はもっていなかった。インド人は文字を採用するかなり以前に、ただ広範な口承文字とだけいいうるものを伴う精緻な文化を発達させた。他方フィリピン群島やインドネシアには、たとえばパラワン島のタクバヌア族やミンドロ島のマングヤン族のように、その他のどの点でも未開と呼んでもさしつかえないのに、おのれ自身のアルファベットをもっているいくつかの部族が存在する。だから文字使用の能力は文明の識別基準とはならない」（バグビー『文化と歴史』）ものである。

文字の発明以前だって、戦争も動物の馴致も人口増殖も人口移動もあったに違いないのだ。人間は成長し、子供をしつけ、外敵から身を守り、おのれの環境を効果的に利用してきたに違いないのである。“人間はみずから自分の歴史をつくってきた”に違いないのである。おそらく、人類発展のまったく初期の段階では、このような地域共同体は完全に自給自足的であり、また独立していたに違いない。それらの共同体は、他のそのような共同体と通婚し交易し協力していたに違いないのである。そこでは生活資

料の生産が人口増加に曳きづられていき、生活手段の増大は、むしろ人口増殖を追いかけている姿を見ることができるはずである。★（詳しくは後のべる）

★ マルサスは生活資料の生産のスピードを亀の歩みにたとえ、人口増加のスピードを兎の歩みにたとえたが——亀は兎に追いつくことができない——ごとく、どちらが歴史の究極の動力となる力をもつかはあらためていうまでもなからう。

ところで、過去と現在をともに説明することが“歴史家の任務”とすれば、単なる“物語”などは、むしろ歴史の名に値しない。「歴史は断じて物語の上に築かれてはならぬ（die Geschichte baut sich nie auf Erzählungen auf）」（クローチェ）ものである。コーリングウッドが「近年、とくにわが国〔イギリス〕では、歴史を連続するさまざまな出来事の物語（story of successive events）あるいは諸変遷の景観（spectacle of changes）と考える誤った歴史観がいかにもたびたび、それも大きな権威をもって教えられてきたため……歴史の語義そのもの（the very meaning of the word）が不純になってきている」と嘆いたように、歴史の概念に対する誤解と不純な使い方に対しては、もういちど注意して論を進める。

それでは何を歴史の原動力として歴史をみるかといえば——歴史家の勝手だといわれるかも知れないが——その史観によって人間社会がどう動かされてきたかについての、一貫した知識の体系が成立していなければならないものであり——したがって、“人口”を歴史の原動力とみる歴史観は当然あってしかるべきであった。なぜならば、人間の生活がその本質において歴史的生活であり、人間こそは1個の歴史的存在だからである。“人間は、歴史がなければ人間たることをえない”存在だからである。ヴィーコ（Giovanni Battista Vico, 1668～1744）★が述べているように——神のあ



らゆる摂理にもかかわらず、根本において“人間みずから人間の歴史を創る”ものだからである。人間生活こそ歴史的生活であり“歴史とは、われわれのあとに引きづる重い鎖”（ニーチェ）なのである。

★ ヴィーコは1668年6月23日、貧しい古本屋アントニオ、ヴィーコの3男（同胞8人）としてナポリの古本屋街サン・ピアシオ・デイ・リブライ通りに生れ、1744年1月22日夜半死亡(75歳)。ヴィーコは人間の同じ性向が伝播や移住によらず、自然発生的に生じてくることを始めて説いた歴史家であって、歴史的な個別性を起えた新しい一点に着眼した歴史家。1699年1月、ナポリ大学教授(31歳)。1725年10月、『新しい学』を出版(37歳)。

“歴史上の大事件にして情熱によって起らなかったものはない”（ヘーゲル）というが、この情熱の原動力はじつは多数の民衆に宿っていたものである。——してみると、多数の民衆つまり人口を歴史の動因とみる歴史観がなければならないはずである。どの世代にしろ、それ自身の解釈者たち、すなわち過去がその時代の新しい必要や問題と、どう関連づけられるかを示すことが歴史であったはずである。明確な意図、解明すべき問題、検証すべき作業仮説〔小論の場合では“人口”〕をいつも念頭において“過去と対話”することが“歴史”であった。何を分母として歴史を分析するかが歴史家の自由であるとする“歴史とは、まさしく選択である”（L. フェーブル）ともいえる。★

★ 歴史は、あらかじめ書かれてはいない。また自然や宿命のように定ったものでもない。したがって“自由”なものであり、人間が自分自身にとってそうであるように、予測することもできないものであるから“歴史とは選択”である。

したがって“人口”を歴史の究極の原動力とみる歴史観を選択することも歴史家の自由である。南 亮三郎先生★は、早くも昭和10年5月（今より50年も前）に「人口問題をもって歴史問題とみること、したがって人口理論は歴史理論との関連において、もしくは歴史理論そのものとして考察されねばならぬ。人口現象は、ほんらい自然発生的な現象でありながら、われわれの眼にうつる限りにおいて、それは社会現象であり、歴史現象である。人類の歴史は人口の増減運動としてみずからを具現する。人口運動を通じて、人ははじめて、人類歴史の神秘を探りうるであろう」（『人口理論と人口問題』序文）と述べておられる。まさに人口史観の本質に迫る着眼であった。

筆者は、先生の恩命を果すため、小論ではまず人口史観の概念を明確にすることから始めよう。

★ 恩師南 亮三郎先生（明治29年10月生れ）は、昭和60年4月26日、午後7時、蜘蛛膜下出血（脳出血）のため、西荻窪の友愛病院で88歳の生涯を閉じられた。先生のご遺体は八王子市上川霊園に眠ることになった。先生から筆者あてのお手紙には「わたしに代ってよい人口哲学を書いて下さい」（昭和60年2月4日付）とある。これが先生が筆者に与えられた最後の手紙となった。

亡き先生の遺志に応（こた）えるため、筆者は拙（つたな）い筆をとることにした。南先生がいわれたことは——1)どの歴史家も気づいていない歴史観があること（『人口論五十年の後』） 2)唯物史観の誤りは“人口を見逃していること”であった。

小論では、この1), 2)を明確に伝えとともに、人口史観について述べ、先生のすぐれたご提唱である“人口史観”と“人口哲学”（人口史観の哲学的“基礎づけ”）について、あらためて提唱することにした。

## I. 歴史の見方

歴史とは何であるか。歴史とは単に過去の史料の研究ではない。物語風の歴史（*erzählende Geschichte*）は歴史ではない。何となれば、そこに“科学としての性質”（*the character of science*）が欠落していて、単なる記録だからである。たとえば、たんに出来事についてのみ語る——政治的できごとの歴史のようなもの——は何ら学問的地位を保持しないものである。それは、あくまで“物語”であって、けっして歴史的分析ではない。それらは対象に関して非歴史的だし、また方法に関して非歴史的であり、価値に関して非歴史的だからである。歴史とは“暗記もの”ではない。★

★ 歴史は史料を必要とするが、史料とは、それ以前の人びとの思想、行為の残した跡（*traces*）である。“史料なくして歴史はない”（*No documents, no history*）といえる。（H. V. Langlois & C. H. Seignobos, *Introduction to the Study of History*, P.17参照）。史料は砥石のようなもので、われわれは、この砥石によって、われわれの史的認識を磨くものである。つまり史学研究の目的は史的認識という小刀を磨くことにあるのであって、砥石たる史料にあるのではない。だから、われわれは決して史料の奴隷となるべきではない。（大類 伸『史学概論』共立社，208ページ参照）

E. H. カーのいうように「歴史とは、歴史家と事実の間の相互作用の不断の過程であり、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話（*an unending dialogue*）<sup>1)</sup>」なのである。ただし——すでに述べたように、未来を予測するなどという意味はいっさいない。未来の問題は、歴史観の範囲外である。歴史を“展望的に把握する”ことは史的認識の領域外に属する。

歴史は生起（*Geschehen*）であるとともに、この生起の自覚なのである。したがって、歴史は思想の特殊形態であり、「歴史的過去は自然的過去と

は違って生ける過去 (a living past) のことで、歴史的思惟 (historical thinking) の行為によって生かされる<sup>2)</sup>ものである。★

★ 30年戦争のとき、リュツェンの戦いで、ある弾丸が飛んだ道は、自然科学者にとっては何の価値をももたないことであるが、その弾丸がプロテスタント軍の総師グスタフ・アドルフ王をたおすことによって、その弾丸の飛んだ道は歴史家にとっては重要な問題となる。またカエサルが当日昼食に何をとるかは、歴史の問題にならないが、彼が昼食に加えられた毒によって殺されたとすれば、この昼食は歴史的な価値をもつことになる。歴史的思考とは、自然的過去と違って、価値に関係する“生ける過去”を取扱う。

歴史は、われわれがそれに基づいて生きているところの記憶といってもいい。歴史は“生ける過去”を取り扱う。現代を解明することに、歴史的思惟の本来の意味がある。コーリングウッドは歴史の4特性を明示して「a)歴史は科学 (scientific) であること、b)歴史は人間主義的 (humanistic) であること、c)歴史は合理的 (rational) であること、d)歴史は自己啓示的 (selfrevelatory) であること<sup>3)</sup>」の特徴をもたねばならないと述べているが、この場合“自己啓示的”ということは、人間が行ったことを人間に語ることによって、“人間とは何か”を人間に教えることなのだという。いいかえると、歴史は起源と目標〔未来ではない。歴史観のターゲット〕の間に成立するもので、しかもそこに統一の理念が働いているものである。だから共通の“分母”がなければならず、“分母”を何にするかによって、歴史家の歴史観が生れる。つまり歴史の全領域を1つの有機的全体として統一することがまず必要となる。というのは、現実それ自体は、もろもろの現象がバラバラなものでなくて、1まとまりとなった流れのなかにあらわれている継続的な過程であるからである。ここに歴史の“巨大な連続体”としての性格 (マルク・ブロック) がある。「歴史とは、過去から現在

を通過して未来へ溢れ出て、いやおうなしに、われわれを押し流していく荒れ狂う急流（turbulent river）<sup>4)</sup>」にたとえていいものだからである。だから歴史といわれる意味深い全体が成立するのである。滔々と流れる歴史的できごとの流れのなかから全体として取り出されるもの、そしていっさいの現象において、1つの“分母”にまとめられるものをもって統一しなければならない。そうすることによって、われわれの目的は、歴史の事実の多くを解釈することができ——そして一般命題を定式化し、また検証することができるような、明確で首尾一貫した、わかり易い概念体系をきづくことができる。

がんらい、事実の確認と記録が歴史の手法であり、一般的法則の解明と定式化は科学の手法であるとされてきた。そしてこれまでの歴史は未開社会ではなくて、文明社会についてのみ一般的な法則を立ててきた。しかし“人口”を歴史の究極の動因と考えると原始未開の社会にも適用しうる歴史の定式化が可能となる。その意味で“人口史観”は唯物史観より、より根底的な史観たりうるであろう。なぜなら「真の歴史とは何よりも原理的な思考のはたらき（die Geschichte ist vor allem ein Denkakt）」であり、過去への関心にではなく、現在の関心（nicht einem vergangenen, sondern einem gegenwärtigen Interesse）に答えるもので「すべての真の歴史は現代の歴史（Geschichte der Gegenwart）<sup>5)</sup>」でなければならないからであり、いいかえると、“原始古代社会は除外する”とか“現代高度資本主義社会では適応しない”という歴史観では、原理的思考がはたらいっているとは思えないからである。——とすると、全歴史を一貫して流れていて、少しも例外なく適用できるものといえば、“種の繁殖”（人口増加）を歴史の究極の動因とする人口史観の方がより根底的で、首尾一貫しているといえることは確かである。

この点について、南先生は「わたしは人間社会に1つの原理が貫流していると考え。その原理には、どの歴史家も着眼していない。それは人間

の生活が人員の増加によってせばめられ、そのために人間生活が、これを抑止しようと努力する。そこからさまざまな抑止要因が働き、社会の諸制度がこれに呼応する。一言にして、人間社会には“人口”をめぐって、“均衡”と“均衡破壊”との2つの相反する作用が現われる。“人口問題”と呼ばれるのがそれである。わたしは、こうして人間の歴史を新たに構想して行きたい<sup>6)</sup>と述べておられる。すなわち“人口”を歴史の究極の動因として、歴史を分析、考究する歴史観が構想できる。しかも、その歴史観はこれまでの歴史家が着眼しえなかったものである。これこそ南先生が“人口史観”として構想されたものである。

いうまでもなく、歴史学は「もっぱら史料を取り扱うが、決して史料が歴史学の対象なのではない。歴史学の対象はあくまでも過去の事実であって、史料は単にそれを媒介するものに過ぎない。史料 (Quelle, Source) という字が単なる材料 (Material) でなく、事実をそこから汲みだす場所としての意味を持った言葉であることを忘れてはならない。このことがしばしば忘れられるために、歴史家は時として“史料の囚人”という嘲笑をあびる<sup>7)</sup>」のである。したがって、われわれは、人口史料がわれわれに示すものを——人口史料を砥石のごときものと考えて——史的認識を磨かねばならないということである。

ところで、ゲシィヒテ (Geschichte)、ヒストリー (History) の両語でいいあらわされるものは——ベルンハイム★によると——「起ったこと自体 (das Geschehene selbst) だけでなく、歴史の知識 (Geschichtskunde)、歴史研究 (Geschichtsforschung)、歴史叙述 (Geschichtsdarstellung) [と、さらに] 史学 (Geschichtswissenschaft) をも含んでいる<sup>8)</sup>」ものであるが、

★ グライフスワルト (Greifswald) 大学のエルンスト・ベルンハイム (Ernst Bernheim) は方法論について、すぐれた研究をなし、それが *Lehrbuch der historischen Methode* (Leipzig, 1894. 8 vol.) となっている。

歴史的知識とその叙述法の発展については、ふつう以下の3段階がある<sup>9)</sup>という。

1)物語風歴史(erzählende Geschichte)

2)教訓的あるいは実用的歴史(lehrhafte od. pragmatische Geschichte)

3)発展的あるいは発生的歴史(entwickelnde od. genetische Geschichte)

そして、この第3段階において、歴史的知識は、はじめて“真の科学”となりうるのである。なぜなら、ここで初めて独特の因果連関(Kausalzusammenhang)をなすところの諸事実の独特な領域としての素材の純粋な認識が目指されるからである。いかにして、それぞれの歴史現象が、その時代において、あるようになったのか、またそれがいかなる作用を及ぼしたかを発展的に知りうるからであるという。★

★ ヘロドトス(Herodotus, 前484-425)の歴史は物語風歴史といえるしツキジデス(Thucydides, 前471-401)の歴史は教訓的歴史あるいは実用的歴史である。アウグスティヌス(Augustinus 354-430)は神学的教會的歴史観をもって、いた。ルネサンスにいたると、ヒューマニズム的歴史学、ヒューマニズム的歴史叙述にかわり、18世紀の啓蒙時代では啓蒙的歴史哲学にかわり、19世紀に入って唯物史観が台頭する。(西村貞二『現代ヨーロッパの歴史家』創文社、参照)

こうして歴史学に特有の研究方法は、まず史料を重視し、史料に基づいて事実の認識を行うことであった。したがって歴史学には、特に史料学(Quellenkunde)および史料批判(Quellenkritik)という基礎部門が付随してくる。ということは事実を認識するためには単に事実の意識をもつだけでは不十分であり、特別な技術を必要とするからである。歴史学のいわゆる“実証性”の本質はこの“批判”にある。「“批判的”ということをもって歴史学の方法の特質を表わすのが適当<sup>10)</sup>」だからである。繰返していう

と、不十分な史料にもとづく歴史観は不十分な歴史観であるということである。

ではまず原始古代社会について考えてみよう。最も古い歴史上の記録は、どここの国でも、ふつう“物語”として伝わったものからできている。どこでも“神話”と“歴史”をハッキリ区別することができない。つまり“何ら批判のない (ohne kritische Sonderung)” 伝説の寄せ集めからできている。つまり正確な史料が得られない状況といえる。前述のベルンハイムの第3段階の認識は仲々容易ではない。また歴史の使命というものが、個々の文化領域のあいだの連関を実証することにあるとすれば、歴史家はまず、その連関を認識しなければならなかったはずである。無尽蔵ともいべき多様性をもつ事象のあいだの連関をよく認識して、1つの共通の“分母”から解明することが必要であったはずである。

では、この点から唯物史観（これについては章を改めて述べる）を考えてみよう。結論からさきにいうと——「人間の生が、単に下部構造（経済）によって規定されるという唯物史観は——現代の“最大かつもっとも危険な錯覚”と断定しうる〔からである〕。そのような考えがマルクス主義的教説として説かれるなら、それは、あらゆる高度の精神生活を、たんなるイデオロギーをもつ1つの遊戯に切り下げ、またそれと同時に、なんらかの真の理念を信ずることを粉碎してしまう<sup>11)</sup>」誤りを犯すことになるからである。——唯物史観が歴史法則を打ち出そうとする勇ましい試みの1つであることは認めるが——歴史的事実の荒海で難破の浮き目をみている現実を見逃してはならない。

その理由はなぜであるか。筆者は唯物史観が古代社会を十分に知らぬまま、歴史発展の段階理論を築いたことにあると思う。

人間の歴史発展の出発点は“粗野な無規則な自然力としての人間” (der Mensch als wilde, regellose Naturkraft) であったはずである。宗教文化、芸術文化、経済文化等々が加わったといっても——要するに“文化とは灼



熱せる混沌を包む薄いリンゴの皮（ein dünnes Apfelhäutchen）”であった。文化とは単なる皮であった。（内味は、むろん人口“種の増殖”の結果である）。人間の歴史の出発点は何といても人間の生そのものであったはずである。こんにちの高級文化といえども——もともと未開人（Barbaren）から始ったものである。★

★ 南先生は「わたしは近年、いろいろな文献を調べている間に、ティコピア（Tikopia）という太平洋上の小さな島のことを知った。もと英領ソロモン群島の中の1つで、面積はわずか数平方マイル、人口は1930年代に1,200人という小さな島である。外部との交流もなく、完全に孤立したる原始社会を持続しているらしい。そういう孤島にこそ、わたしのいう“人口史観”はまざまざと目撃されるであろう」（『人口論五十年の後』67ページ参照）と述べておられる。

歴史とは、すぐれて人類の文化にかんする学問であり、文化生活は意味ぶかい出来ごとを示すものである。文化をつくるものは、もとより人間であるが、文化は歴史の始期においても存在したものであり、人間は繁殖の結果、現代文化を築いてきた。人口増殖の結果、こんにちの現代文化の達成をかちえたわけであり、歴史は「眼に見えない形で、“生の生産および再生産”の2重性、すなわち“1方では労働の、他方では生殖の”その間の調整——1言にして“人口問題”の支配<sup>12)</sup>」を受けていたのである。★

★ トインビーの名著『歴史の研究』の第1巻、第1篇、序論の第1章が紀元前725年から325年までの約400年間における古代ギリシアの都市国家の“生活手段に対する人口圧迫”という問題を取りあげている点に留意。

このような人類の始源における歴史を見逃したところに唯物史観の“誤り”がある。既に述べたように、文明以前の原始・古代社会の人間の生活

は確かに十分にわかってはいないけれども——確実にいえることは「エンゲルスが“人間の生産”(Menschenerzeugung)を歴史の独立の発展要因(Entwicklungsfaktor)として、経済の発展と同様に取り扱ったこと」<sup>13)</sup>だけは確かである。ここにもマルクスに比してエンゲルスの“優位性”を認めると共に、種の繁殖(人間の生産＝人口増加)こそ、歴史の究極の動力と考えるべきであることがわかる。南先生は「こういうように、“古代社会”を見てくると、唯物史観における“生の生産および再生産”という1事は、1方での食物の生産、他方での子孫の繁殖という根本事実が ein verdoppeltes Verhältnis (1つの2重の関係)を構成するということは疑うことが出来ないと思う。それは確かに、相互につながり合った、切ろうとしても切りはなせない根本事実であった。しかし両者の関係はそれだけではない。子孫の繁殖がつづけば、前の食物の生産という面が一層の重圧となってくる。今までは、当人たちの間の仕事であったものが、こんどは繁殖した子孫のためということになろう。換言すれば、人口の増加とともに食物の生産が一層の緊急事とならざるを得ない。このところが唯物史観では見落されている。わたしは、この点で唯物史観を去らねばならない。わたしのまえには別の史観が頭をもたげている。一言にして、わたしは“人口史観”をめざしている」<sup>14)</sup>と述べられた。

唯物史観が、古代社会について深く検討しないまま構想された荒けずりの歴史観であったことは既に述べたが——唯物史観は多くの曖昧さを含むところの“1個の発展段説”でもある。つまり「唯物史観は、人類社会を“アジア社会、奴隷社会、封建社会、資本主義社会”の4つの発展段階に分つものである。この4つの発展段階の前に、モルガンの『古代社会』によって提起され、エンゲルスの『家族・私有財産および国家の起源』によってマルクス主義の中に採用された“原始共産社会”をおき、また資本主義社会の後には社会主義社会が来るべきであるという主張をこれに加えるならば唯物史観は結局人類の発展を6つの段階において考えるもの」<sup>15)</sup>

であり、“唯物史観が1個の発展段階説であることは、あくまでも事実”である。

とすると、ここに問題が出てくる。まず、“原始共産社会、アジア社会、古代社会、封建社会、資本主義社会”という発展段階説と事実との適合関係が当然問題になってくる。端的に言って、こんにちでは「原始時代に関しては、多くのことが不明確というのが正しいであろう。そして立証し得る事実の上にのみ科学が構築されるべきであるならば、“原始共産制”の理論を今日（こんにち）維持することは不可能<sup>16)</sup>」といわねばならない。★

★ エンゲルスは古代社会における“婦人の高く尊敬された地位”（hochgeachtete Stellung）について論じているが——もし、これを証明せよ——といわれたらエンゲルスは当惑する以外はない。（H. Cunow, Geschichts-Gesellschafts-Staatstheorie, II Band, S. 125をみよ）そのくらい古代社会については不明な点が多い。

★ 先史学と先史考古学の最も重要かつ不朽の成果は、記述史料に対する歴史家の伝統的な信頼感を打ち砕き、記述史料の伝える情報は信憑性に乏しく神話的性格が強いことを証明したことである。（バラクラフ（G. Barraclough）『歴史学の現在』岩波書店、134～5ページ参照）

次に「第2の段階としての“アジア的生産様式”はマルクス自身の主張が既にはなはだ曖昧であるためにマルクス主義者の間でも久しく意見の一致を見なかったものである。ただしこの“アジア的生産様式”を他の諸段階と並ぶ歴史の1段階と見なすことが無理であることは一見して明らか<sup>17)</sup>」なことである。★

★ ソ連科学アカデミー会員のエウゲニー・M・ジーコフでさえ、唯物史観の“時代区分”の独善性を批判している。（G, バラクラフ『歴史学の現在』22

ページ参照)

- ★ マルクス主義歴史家たちの間でさえ、独特のアジア的生産様式というマルクスの概念はどこまで支持しうるかという疑問が提起されている。(同書, 187ページ参照)

また「歴史の決定的要因として“生産諸力および生産諸関係”という物質的な要因と“階級闘争”という人間的な要因とは必ずしも整合的な関係において結びつくとは限らないのである。“生産諸力と生産諸関係との間の衝突”がすなわち“階級闘争”であるのか否か。……それは理論的にも事實的にもなお明確さを欠いている。そもそも“生産力”の概念が、唯物史観においては常に強調されるにもかかわらず決して明確に説明されたことはない。それが単なる“労働の生産性”や“生産技術”を指すのであれば簡単であるが、唯物史観においては、この言葉はそれほど簡単に使われてはおらず、また単にそれだけの意味であるならば、決して“歴史の要因”としても、あのように大きな地位を与えられることはないであろう。“生産関係”についても、また“生産力”と“生産関係”との関係についても厳密に検討すれば同様にはなはだはっきりしない点が生じてくる。そしてこれらすべてに存在する曖昧さが、唯物史観による歴史叙述の上に1つの難点を構成していることは争われない事実<sup>18)</sup>である。クローチェは唯物史観は形而上学的危険(Peril Métaphysique)をとともなうと断定する。[具体性がない。]というのは、この段階理論は「実際の歴史においては、連続したり相互に混合し合ったりして、時によれば、それが最も奇妙な形態をとって連続したり混合したりすることもある<sup>19)</sup>」のに、唯物史観ではその点が曖昧である。唯物史観は将来における“階級なき社会”を理想とし、かつ必然とするが、それは暗示的な基準(canon)ではないのか。というのは、唯物史観では“これまでの歴史は階級闘争の歴史である”とするけれども「歴史は将来においてさえ、しかも階級なしでも発展し続け

る」<sup>20)</sup>ものであり、「それが歴史というものであって」、そういう意味からいうと、唯物史観は“偶然の形而上学” (métaphysique du contingent) になるという。

さらに、唯物史観にみられる歴史的誤謬は——“歴史は〈あったもの〉に対する考察であって、決して〈必然あるべきもの〉にまで手を伸ばすことはできないということを忘れてのことである。確かに「すべての歴史は現代の歴史として、われらのなかに取り入れられるに相違ないが、過去の事実の具体性は、歴史の上では、そのまま将来の事実の具体性とは、なり得ない」<sup>21)</sup>ものなのである。わかり易くいうと、唯物史観のいうように、現在の社会（資本主義社会）が崩壊する必然性をもつものとしてみよう。しかし、その場合、資本主義社会がどのような具体的な経過をとって崩壊するか——などということは、現在においては明示できぬものである。いわんや、次に来るべき社会が社会主義社会であるなどと予言することは到底できないはずである。何となれば、こういう将来の予言は歴史観の範囲外なのである。“理解可能な歴史研究の領域” (intelligible field of historical study) (トインビー) の範囲外のことであるからである。歴史研究においては「人間思想の将来の発展を予言することも規定することも出来ない」<sup>22)</sup>ことは、歴史学の常識だからである。

## Ⅱ．歴史哲学としての人口史観

ここでわれわれは唯物史観と実践の関係について省察すべき地点に辿りついた。いうまでもなく、唯物史観はマルクスとエンゲルスが若き日に創始した歴史哲学であり、彼らにとって生涯を通じて“導きの糸”となった歴史観であった。マルクスは『経済学・哲学手稿』(1844)のなかで、共産主義を“歴史の謎を解くもの”とさえ述べた。

ところで唯物史観の実践性つまり政治的戦闘性 (political militancy) を

考えてみると「唯物史観という黙示録（apocalypse）が何百万という人びとに多大の感銘を与えるのは、その図式の政治的戦闘性によるものである。この“青写真”は、まさに一般的な“歴史哲学の1つの核心”をなすものであり、革命的戦闘命令（revolutionary call to arms）といわれている<sup>23)</sup>」ものである。じつはこの“実践性”が問題なのである。

まず、歴史哲学とは何か——ということから述べる必要がある。

歴史哲学（philosophy of history）という名称は、18世紀にヴォルテール（Voltaire, 1694～1778）が創始したものであるといわれる。★

★ 歴史哲学という名称はヴォルテールが1754年に公にした“国民の風俗および精神に関する論”（Essai sur les mœurs et l'esprit des nations）という書で、はじめて用いたものであるといわれている。歴史哲学という言葉はこの書物がほぼ完成したあと、1756年に書物の序文として付加した部分に与えた名称である。それはアウグスティヌ的な歴史観に対する反抗に基いたもので、ヴォルテールは彼の愛人シャトレ侯爵夫人（Marquise du Châtelet）の乞いを入れてエッセイを書いた。彼の歴史観の根底にあったものは、啓蒙主義的な知性であり、自然法的な抽象的合理性であった。しかし、ヴォルテールのこの著作は、歴史記述の方法においても、歴史解釈の様式においても、1つの革命をもたらす。ヴォルテールは、この著作の序論をなしていた最初の53節を、1756年に“歴史哲学”と名づけて公刊したのだが——歴史哲学という彼の造語は、哲学と歴史学の分野で永続的な市民権を獲得したのであった。ヴォルテールの革命的な提言というのは、これまでのように歴代の国王（支配者）などの歴史でなしに——諸文明の歴史を書くべきだ、としたことにある。

歴史哲学は哲学の一部であり、したがって哲学の他のあらゆる部分と密接に結合していて、哲学体系の中の1構成要素をなしている。トレルチは「歴史哲学は1つの近代的創造物であり、他の多くのものがそうであるよ

うに18世紀の子供である。それは近代の倫理や文化ときわめて密接につながっている。この近代の倫理や文化が持っている課題や問題は、もはや歴史なしには解決をつけることができなくなった。だから歴史哲学は学問のなかの遅刻者といったものではない……歴史哲学はむしろ人びとがそれを必要とした瞬間に、世界観の困窮がそれを要求したまさにその瞬間にはじめて出現した。歴史哲学は歴史研究の事柄であるよりも、むしろ世界観の問題<sup>24)</sup>」なのだと解説している。

筆者は前節で、歴史とは“現在から過去を照らすサーチライトのようなもの”だと述べた。その場合、歴史を有機的・統一的全体としてみるとき——サーチライトに照し出される事象について1つの法則性（統一性）を求めて——歴史を全体として、統一的理念によって解釈され理解されうるものであると考えて、歴史的思考を再思考するとき、“歴史哲学”が生まれる。歴史発展のパノラマ（das Wandelbild dieser historiographischen Entwicklung）について、その究極的原因を求めて再思考するとき歴史哲学が生まれる。だから高坂氏は「歴史哲学とは、誤まれる観念を否定し、歴史の中に時間即永遠であるごとき絶対の生命に帰入する道を示すもの<sup>25)</sup>」と定義した。つまり歴史哲学は永遠に通じる道（公分母）を示すものであり、歴史哲学は世界観の中心点に位置する。また歴史哲学は価値の領域と密接な関連をもつから現代のように主導的地位を争い合っているさまざまなイデオロギーのうちどれを択ぶか——という問題は、相異なる価値体系のうちどれを選択するかということになる。その意味で、歴史哲学は万人の関心事でもある。しかしどんなイデオロギーにしても「歴史的裏付を欠けば、それは素人談議にすぎない<sup>26)</sup>」ものである。ここに“歴史哲学”の歴史学的意味がある。ただしヴォルテールの歴史哲学は「批判的ないし科学的歴史を意味するにすぎず、歴史家がみずから決断した歴史的思考の1形式<sup>27)</sup>」を指していた。「18世紀末には、ヘーゲルその他の著述家が同じ名称「歴史哲学」を使った。この場合“歴史哲学”といっても、意味

が変って、単に普遍的ないし世界的な歴史 (universal or world history) を  
いうと考えられた。3度目に19世紀実証主義者 (positivists) の何人かが、  
この言葉「歴史哲学のこと」を使っている。[だが]、彼らにとっての“歴  
史哲学”は歴史家が詳述すべき、さまざまな出来事の過程を統括する一般  
法則 (general laws) を見出すこと<sup>28)</sup>であった。18世紀に入ると、歴史哲  
学は明らかに近代的局面を迎える。この「近代的歴史哲学を創めたのは誰  
であるか」というと、ドイツ人のエルンスト・トレルチ (Troeltsch) によれ  
ば、それはフランス人のヴォルテール (Voltaire) であり、フランス人のミ  
シュレ (Michelet) によれば、それはイタリアの人ヴィーコ (Vico) だとい  
う。われわれの見るところでは、この2人の天才は互に美事に補い合っ  
ているので、ともに近代的な意味の歴史哲学の樹立者とみなさるべきである。  
時間的に先行したのは、ジャンバティスタ・ヴィーコである。すでに1725  
年、ヴォルテールよりも40年さきに、彼は名著『新しい学』(Principj di  
Scienza Nuova d'intorno alla comune Natura delle Nazioni) を公刊した。  
この著作は、歴史哲学の世俗化の発端をなすものであり、フリードリヒ・  
マイネッケ (Friedrich Meinecke) が適切に述べたように、歴史的思惟の  
“新オルガノン” (novum organum)<sup>29)</sup>」なのである。というのはヴィーコ  
のいう「社会的世界は、確かに人間によって作られたものであるから、し  
たがってわれわれはその原理を、人間精神そのものの変化のうに求め、か  
つ見出さなくてはならない<sup>30)</sup>」というのが、ヴィーコの偉大な発見だから  
である。この発見とそこから引き出される結論によって、ヴィーコは  
歴史哲学と歴史記述の世俗化に先鞭をつけたのである。つまりヴィー  
コによれば「残忍さ (ferocity) や強欲 (avarice) や野心 (ambition) など  
という悪徳が、人間社会によって、[アベコベに] 勇気 (courage) や勤勉  
(industry) や公德心 (civic activity) という社会的美徳へ転化する経緯を  
示して、以下のような考察をもって結論としている。すなわち「これら  
すべてのことは、神の摂理、神の立法的理性が働いていることを立証してい



る。これあるがゆえに、私利のみに没頭する人間たちの情熱も、本来なら荒野の猛獣のごとく生きていたはずなのに、こうして市民的秩序を創造し、社会の中の個々人として生きることになったのである」と。ここにわれわれは情熱の価値転換をみる。従来の合理主義は、つねに情熱を理性によって断罪してきた。ところがヴィーコにおいては「これらの情熱が個人的生活圏から社会的生活圏へ登っていくかぎり、1種の弁証的逆転によって美德の地位に引上げられていく<sup>31)</sup>」のである。この価値転換は、やがて重要な結果をもつことになるのだが——悪徳があればこそはじめて美德というものを容認しうるのだというヴィーコの価値転換が歴史に与えた影響は大きい。「多数の人びとがデカルトによる改革に追随し、あるいはこれを攻撃していた間に、ひとりの孤独な天才が歴史哲学を創造していた（a solitary genius created the philosophy of history）というジュール・ミシュレー（Jules Michelet）の表現<sup>32)</sup>」は適切であった。こうして歴史哲学はイタリアの若き天才によって突破口を築かれたものであった。

ところで、哲学は反省的なものであり、歴史は“生ける過去”をとりあげる。その場合、思考対象と関連した思考は、単なる思考ではなく認識である。したがって「哲学にとっては、〔歴史哲学〕は知識の理論すなわち認識論<sup>33)</sup>」となる。

では、ここで唯物史観と人口史観を対比して考えてみよう。

繰返していうと、歴史哲学は認識論であり、唯物史観は歴史哲学である。——とすると、ここで直ちに実践との関係が問題となってくる。確かに唯物史観は“科学的社会主義”と自称し、共産主義社会を理想社会とする。しかし考えてみると、“理想は証明することができない（Ideals cannot be proved）”ものであって、理想という以上は科学ではありえないはずである。しかも「革命の翌日（the day after revolution）には合理性が歴史の舞台に先触れとして出現（heralded appearance）し、社会をことごとく正常ならしめるだろう<sup>34)</sup>」という説得は余りにも皮相的（superficial）なもので

ある。こういう皮相的発想については、コーリングウッドやラングロア、セニョボーその他の数多い歴史家が繰返し戒めているところである。

このように唯物史観は歴史哲学として考えていっても矛盾をもつ。生半可な唯物史観の信奉者の妄信したように「資本主義はヘビのすたれた鱗のように、しなびて不用となって歴史の路傍にはげ落ちるであろう (capitalism, like the dead scales of the snake, would fall, withered and unused, by the roadside of history)<sup>35)</sup>」という予測は歴史哲学の範囲外の勝手な妄想である。資本主義が“歴史の路傍にはげ落ちる”かどうか、歴史の未来については歴史学の範囲外のことに属する。ここに実践と結びついている唯物史観の論理上の無理がある。何故ならば、“ザインからゾレンは学問上ではでてこない”ものだからである。

他方、歴史哲学としての人口史観を考えてみよう。

歴史哲学の重要な課題は、歴史を動かす力は何であるか、歴史的形能力は何であることを示すことであった。しかも前節で述べたように——人間の歴史的発展の出発点は“粗野な無規則な自然力としての人間”であった。南先生は「まず“原始社会”を考えよう。そこでは最小単位としての“家族”がどういう構成をとっていたのかは不明であるが“結婚”は人間自然の性情から出でるとすれば、この社会段階でも否定され得ない。そうすれば当然に新たな人間の出産、すなわち出生がはじまる。子供たちはある年齢までは完全な被扶養人口である。そこには、すでに肉体の弱った老人も、たまにはいたであろう。すると“結婚”の当事者たちは、自分たちだけの生活資料ではなく、これらの被扶養人口を養うためによけいに働かねばならない。しかしこの頃にはまだ牧畜や農耕がはじまっていない食物採集段階であるから、彼らの作業の成果は何ほどにもあがらない。しかも他方で人員だけは遠慮なしに増加する。そういう段階では、ふえる人員を生存可能の範囲内に抑止しようとする目に見えない原理がはたらく。いろいろな方法でふえる人員を抑止しようとする習俗も生ずるであろうし、この

社会の習俗が個人の行動を左右する社会規制の形をとるであろう。出産後の長い間の禁忌とか、嬰兒殺しとか、棄老とかはその代表的な方法であり、原始社会にあっては平均寿命は短く、出生はあっても死亡が多く、かくてその社会の人口が長い間、停滞しているというのが、この社会段階〔原始社会〕の特徴であった。

この“原始社会”でも後段になると、牧畜や農耕が発生するであろう。人間労働の生産力はこの産業の発達とともに著しく高まるから、その種族の人員は大幅に増加しうる……“古代社会”に移ると事情は全く異なってくる。そこでは生産も、牧畜や農耕におよんでいるばかりでなく、商業や外国貿易がある程度まで発達する。もしもこの社会段階に、ギリシアやローマの古典古代を連続させるならば、そこでは高度の文明が発達しており、かの原始社会の停滞性などはない。ヴィーコのいわゆる“神々の時代、英雄の時代、人間の時代”という循環さえこの古典古代の段階には見られるのである。生活資料の生産はもはや社会の一部にしか負わされず、身分や階級の対立が明白に現われてくる。それにつれて“家族”の観念はいよいよ明確となり、しかもそのなかには私有奴隷さえ含まれるという状況となった。全体としてその社会の“人口”はふえ、国外移住は盛に行なわれた。しかし原理は変らなかった。人口は生活資料の範囲まで増加しつづけ、その限度に達するや否や人口は国外に押し出されるか、あるいは国内でこれを抑止した<sup>36)</sup>」のである。一言にしていえば、「社会のふるい段階にさかのぼればさかのぼるほど判然と“人口”は食物と場所のゆるす可能性の範囲で規制された。この可能性の範囲は後の段階にいたるほど生活水準という要素によって削減され、したがって人口増加はそれだけ抑止されるが、それでも人口はより高められた生活水準によってせばめられた可能性の範囲をいっぱい満たして行く<sup>37)</sup>」ものである。★

★ おそらく30万年以前に、はじめて人間が人間になって以来、この世に現われ、

姿を消していった未開社会が一体どの位あったか見当がつかないが、未開社会は数は多数だが、比較的短命であり、比較的狭い地理的範囲に限られ、その人口も比較的少数であったと考えられる。(Toynbee, A Study of History Vol. I, p.148)

ここにわれわれは前記の原始・古代歴史発展のパノラマから“人口”を歴史の動因とする歴史哲学を窺い知ることができる。なぜならば——原始・古代社会を通じて動かすことのできない根本事実は“一方では生活資料の生産、他方では種の繁殖(人口増加)”という根本的・普遍的事実であった。しかも、この2面の行動では「どちらかと言えば、“種族の生産(人口増殖)の方がより基本的である。衣・食・住の生活資料の生産は“種族の生産”によって、言いかえれば“人口増加”によって、一層強化されざるを得ないから<sup>38)</sup>」である。★

★ 人口の不断の増殖傾向が人間を駆って勤勉に立ち向わしめ、あらゆる社会進歩に対する最強の要因として作用するということは初版当時からマルサスの明瞭に認め、かつ強く主張していたところであった。マルサスはいふ——世界がこのように人間の住むところとなったのは、ひとえに人口の増加力が生存資料のそれに優っているがためである。もし人口の増加率が食物のそれと全然同じであったならば、人類が野蛮(未開)の状態を脱し得ることがなかったであろうと考えられる。(南・『人口原理の研究』昭和18年、千倉書房 223～4ページ参照)

未開社会では、むしろ「生産力の発展が伝統的な社会組織や社会諸関係を変化させるような危険な状況があらわれると、生産力をたえず生態学的な環境との既存の平衡状態の限界内におしとどめ、生産力を抑止する社会的メカニズムが作動するという一般的傾向があるように思われる<sup>39)</sup>」状況

であった。

もともと歴史研究のうえで、唯物史観の未開共同体論は誤っているものであった。マルクスもエンゲルスも原始社会に関する知識は、じつはスケッチ風程度のものであった。山内氏は「2人（マルクスとエンゲルス）の視野からは、黒アフリカ、東南アジア、メソ・ラテン・アメリカ、オセアニア、古代オリエントなどの、人類学の宝庫地帯が、部分的ないし全面的に欠落していたと結論できるだろう」と述べたのち「科学としての人類学はまだ形成途上にあり（ワシントン、パリ、ロンドンでの民族学協会の結成は40年代のことであった）、関連諸科学のめざましい発展も2人の最晩年ないしそれ以後のこと（シュリーマンのトロイア初発掘は71年、サルゼックのシュメールの石像発見が77年、エヴァンスのミノス宮殿発掘が99年）であってみれば、〔2人の研究が〕、未完におわってしまったのも、また理の当然であったとしなければならない。この知の白地図〔十分に研究されていなかったこと〕に災されて、マルクス、エンゲルスの素描した未開史の構図のいくつかは、今日ではのりこえられ、廃棄され、決定的に訂正されねばならなくなっている<sup>40)</sup>」と述べている。唯物史観の未開史の構図は誤っているものであった。こんにちでは“廃棄され”“決定的に訂正”されなければならないものなのである。★

★ 原始共産社会はマルクスやエンゲルスが、かつて理想とした社会（永遠の調和の世界）でもあったが——じっさいは、あらゆる人間共同体というものは、大小にかかわらず常にまた同様な他の共同体と、あるいは敵対的に、あるいは友情的に結びついている社会であるから、部族間の闘争や掠奪もあって、必ずしも“理想社会”とはいえない。（K. Lamprecht, *Moderne Geschichtswissenschaft* S. 109参照）

また、狩猟＝採集といった直接的な経済活動から牧畜とりわけ農業とい

う迂回的な経済活動に移行したことによって、人類は未開から文明への最初の決定的な飛躍をとげた——とふつう考えられているが、原始共産社会では、“諸種の社会関係が未分化”であって、いわんや社会が上部一下部という構造的階層に、まだ分れていない時期のことだから、生産力の発展段階に照応する歴史的発展段階理論としての唯物史観は、ここでもジレンマにおちいってしまう。だから山内氏は「プイヨン (Pouillon) もいうように、こうした生産力至上主義をマルクス主義神話の第1として、まっさきに放棄しなければならない<sup>41)</sup>」と言い切っている。

とすると——歴史の究極の動因として考えるものは何か。ボグダーノフ (Bogdanoff 1873~1928) の解説によると——「原始社会の発展の原因は次のごとくである。すなわち生産形態が不活発である結果、早晚不可避免的に絶対的人口過剰が起こる。そして逆に、後者〔人口過剰〕が前者〔生産形態の不活発性〕を打破する。原始的社會心理の極端な保守性のために、技術の進歩は、ほとんど常に人口の増加に曳きずられていき、生活資料の不足は一般的に<sup>42)</sup>いって慢性的」であると。要するに、原始社会では“技術の進歩さえ、人口増加に曳きずられていく”ものである。つまり、原始社会はたえず人口の増加に促されて、当時の生産手段——狩猟の武器や方法——が徐々に完成されていったものである。同時に農業と牧畜とが始まって、これまではただ偶然に、かつ一時的であった余剰労働が、いまや永久的となって、社会の一部のものが肉体的労働から解放されうる条件が次第に整ってくる。しかし基本的にいえば、この時代の発展力は人口増加だったのである。歴史発展の究極の動因は“人口増加”であった。まさしくマルサスのいうごとく、人口増加率が食料のそれと同じであったならば、人類は野蛮未開の状態から脱しえなかったはずであり——生活資料の生産は人口増加に曳きずられていったものとすれば、われわれは“人口”をもって、歴史の究極の動因とする歴史哲学があるべきだということを確認しうるであろう。ここに人口史観が生まれる理由がある。

しかも人口史観は歴史哲学として——純粋な認識論として——“実践”〔革命的暴力的実践〕のような誤りを犯すこともなく，メシア的救済の未来社会を夢想することもなく，純粋一元論として歴史解明に役立つ。

どちらが歴史哲学として，歴史解明のうえで優れているかいうまでもなからう。

### Ⅲ．歴史主義と唯物史観

前節では歴史哲学の概念を述べ，歴史哲学として“唯物史観”と“人口史観”を対比し，人口史観こそ，より根底的であり，歴史解明のうえで，すぐれた歴史観であることを知りえた。

本節では，歴史主義（Historism）として捉えた唯物史観の誤謬を述べる。

まず歴史主義とは何であるか。「歴史主義は“真理と価値は時代の娘である”（*veritas et virtus filiae temporis*＝truth and value are daughters of time）という定式で定義することができる。歴史主義は18世紀の末ころドイツで起こり，ここで19世紀に発展した思想で，真理，法，倫理など，一般にすべての思想とすべての価値を，特定の歴史的時期，特定の文化の所産として，さらには，限られた民族的もしくは地域的集団の所産の所産として把握する歴史的相対主義（a historical relativism）である。したがって歴史主義によれば，これらの思想や価値は，それを創造した時代や文化にとって妥当するにすぎず，極端な場合には，その民族や地方でしか通用しないもの<sup>43)</sup>とする。★

★ 歴史主義の主眼は，歴史の発展ということと，個性的存在つまり歴史も国も民族も階級もすべて個性的存在であるということを重視する点にある。

さまざまな真理や価値の優劣を判定するためには超歴史的な価値基準が予め必要はらずである。ところが、いかなる思想もいかなる価値もその歴史的制約を免れないとすると、つまり、“すべての価値が歴史の娘”であるとすれば、「歴史の過程で創造された真理や価値の相対的功罪を評価する基準となりうるような超歴史的な真理や価値 (transhistorical truth and values) は存在しないわけである。してみれば、歴史の進歩を確認することも、理論的には不可能<sup>44)</sup>」ということになってしまう。★

★ ポッパー (K. R. Popper) は Historicism と Historism と区別して使っている。彼が Historism と呼んでいるのは“歴史的相対主義”のこと、つまり“あらゆる思想が歴史的条件下で決定されている”という思想のことである。

したがって、こんにちでも歴史主義についての解釈はまちまちで——“曖昧な表現”とか“単なる流行語”とみる歴史家もあるくらいだが——要は、歴史主義は1つのアンチ・テーゼであり、歴史主義を理解するには、それが否定しているテーゼを知る必要がある。そのテーゼとは何か。「このテーゼとは自然法 (natural right) [の非歴史性] であり、またその理論的前提をなしている普遍的な人間性あるいは人間理性という思想である。これらの人間の本性や理性は、時代や民族の文化や階級の変遷からまったく超越していて永遠不変なものとみなされている。普遍的な人間の本性およびこれに内在する人間の自然法という思想は、古代ギリシア人が創造した最大の思想のひとつである。ソクラテス、プラトン、アリストテレースの影響を受けて、この自然法思想はギリシア、ローマのストア派の間で次第に発展した。……ソクラテス、プラトン、アリストテレース以来、自然の概念が、約束にもとづく“法律”の概念へと次第にはっきり対立させられるように<sup>45)</sup>」変化していく。一言でいえば、ギリシアの歴史観は“ロゴス的” (高坂正顯氏) であった。ギリシアの歴史家は調査研究者



(researcher) であった。たとえばヘロドトス Herodotus (484～430. B.C. 以後) あるいはツキディデス Thucydides (471～401. B.C.) の著述には、個人的に接触した証人の証書 (the testimony of eyewitness) が主な拠りどころになっていることは周知のとおりである。いいかえると「古代ギリシャに芸術家や哲学者がいたという意味では、歴史家はいなかったといっても、まず差し支えない。歴史の研究に生涯を捧げた人びとはいなかった」<sup>46)</sup> くらいだと述べ、“無時間的本質を論理的に観照” しただけで、この時代では“歴史哲学” などは必要とさえもしなかったのだという。ポリュビオス (Polybius, 204～122, B.C.頃) によって、歴史的思考のヘレニズム伝統はローマの手に渡っていくのだが、ストア派 (Stoic) は、共通の人間本性を、あらゆる民族、人種、時代に共通な普遍的な人間評価基準とみた。つまり自然法の根底にあるコスモポリタンの人道的な理想は、ローマが多民族の構成する世界帝国となった後に、特にローマのストア派によって展開されることになる。★

★ 自然法は理性的人間の生得の感情と判断に照して正当と思われるもののことである。つまり恣意的に《制定された》規則ないし規定と対立するものである。こうした対立は、哲学においては、すでにきわめて古い歴史をもつ。紀元前5世紀のギリシャのソフィストたちが、すでに〈自然によって〉妥当するものと、単に〈規定によって〉妥当するものとを区別していた。この考え方は、次いでストア派、キリスト教、中世教会にも引き継がれていくことになる。(K. Vorländer, Von Machiavelli bis Lenin, 1926. 『マキアヴェリからレーニンまで』創文社、宮田光雄邦訳、昭和58年、参照)

こうしてストア主義はローマ帝国の支配的な政治哲学となり、ストア主義が提唱する自然法の概念は、ローマ法のなかでも認められる。たとえば、“自然法とは事物の本性上、妥当する事柄である” ——と。つまりロー

マ帝国の時代では、自然法は、時間と空間を超えて、すべての人間に妥当するものと思われていたのであった。

中世に入っても、中世を通じて、自然法は少しも疑われなかった。なぜなら「それは形而上学的に見れば、“神の法” the divine law (lex divina)——ユダヤ人に与えられていた旧約の法とキリスト教徒の新約の法——に、しっかり根をおろし、そして究極においては“永遠の法 (the eternal law)”〔自然法のこと〕に根をおろしていたから<sup>47)</sup>」であった。ただし中世では、歴史は“歴史的啓示”に対する信仰が生れている。教義学と教会史だけは盛んであったが、ほんらいの歴史哲学は存在しなかった。ところがルネサンス、宗教改革をくらって、中世の神中心、聖書中心の思想が崩壊していく。自然法は危機を迎える。その時、啓蒙哲学 (philosophy of Enlightenment) が自然法の弁護者となった。世界観の相続人は“自然法の自然科学的・数学的形而上学へと作り変えたもの” (トレルチ) と変っていく。だから、啓蒙哲学は「人間が制定した実定法 (the positive law) と自然法からなる2元論<sup>48)</sup>」といえよう。コンドルセ (Marie Jean Antoine Nicolas de Caritat, Marquis de Condorcet 1743~94) は“今までは暗黒の時代であったが、これからはイルミネートされた、啓蒙された時代でなければならない”と説いた。

だが、自然法は、けっして単なる法概念ではない。法哲学ばかりか、道徳哲学、歴史哲学、価値哲学も関係をもつものである。なぜなら「法 (just) と不法 (unjust) は価値である。そして法が基本的な倫理的な最低限 (the ethical minimum) の要求とみられるかぎり、それらは倫理的価値<sup>49)</sup>」だからである。ディドロ (Denis Diderot 1713~84) は、自然法イコール倫理とみた。カント (Immanuel Kant 1724~1804) は彼の法哲学を自然法の教義の上に位置づけた。フィヒテ (Johann Gottlieb Fichte 1762~1814) はフランス革命を自然法の名のもとに擁護した。経済学ではケネー (Francois Quesnay 1694~1774) の思想のなかに自然法をみる。イ

ギリス、フランスの啓蒙哲学は「経済的領域においても自然的諸力の自由放任を要求するにいたった。そのもっとも卓越した主張者が、フランスではフィジオクラート派、イギリスではアダム・スミス<sup>50)</sup>」であった。

フランス革命に続いたものはプロイセンの反動であり、ドイツ・ローマン主義であり、歴史的に言えば、“歴史主義”の誕生であった。むしろ、そのアンチ・テーゼは、フランス革命の母なる啓蒙哲学であった。だから歴史主義は啓蒙哲学〔の非歴史性〕のアンチ・テーゼとして生れたといえることができる。これまで、啓蒙哲学が説く人間は、理性的に思惟し評価する人間であり、いかなる特定の時処（time and place）にも拘束されない人間であった。ところが歴史主義はこれと全く逆で、「永遠なものとみなされた人類共通の特徴（common rational features of mankind）は背景に退いてしまい、これに代って、——各民族の特質をなし緩やかに歴史的発展、伝統的地盤の上での有機的成長の産物ともいふべき非合理的な生命力（irrational vital forces）<sup>51)</sup>が取って代った」ことを意味する。こうして普遍的人間性というものがないとすると、自然法だって存在理由を失ってしまう。自然法がこの時代にそぐわなくなってしまう。こうして18世紀の非歴史的時代に対して、“歴史の世紀”といわれる時代、歴史主義の時代が訪れる。

これで“歴史主義”の誕生までの過程を知りえた。つまり「歴史主義はフランス風の理性優先（la prépondérance de la raison française）に対する、つまりは啓蒙の世紀（le siècle des Lumières）に対する、ヨーロッパ諸国民の各種伝統および反逆にとって公分母の役<sup>52)</sup>」を果したものである。

ところでカルロ・アントーニ（Carlo Antoni）は弁証法的“歴史主義”《historisme》dialectiqueという言葉で唯物史観を述べているが——「19世紀と20世紀前半の歴史思想、政治思想、哲学思想の大部分を支配して、われわれの文明の運命をも一部決定するところあったのは、実にこの弁証法的“歴史主義”<sup>53)</sup>」だったのである。弁証法的“歴史主義”は革命的プログ

ラム (programme révolutionnaire) にこの歴史主義を適用した。

ここに、予測と現実社会との相違がハッキリ出てきてしまう。歴史主義は——歴史的相対主義であるから——「後向きに過去を (backwards to the past) 眺めるだけでなく、前向きに未来にも (forwards to the future) 眼を向けるものである。それは活動する諸力 (the operative forces) の研究であり、なにかんずく社会的発展に関する諸法則の研究<sup>54)</sup>」であることはいうまでもないが、その場合、歴史主義は“歴史の未来の経過を予測することは不可能” (it is impossible for us to predict the future course of history) という歴史学の鉄則を犯してしまう。だから唯物史観の予測と現実社会の現状の間ではハッキリ違って来てしまっている。つまり「弁証法的図式 (le schéma dialectique) となると、それが誤りであることが明らかとなる。産業の発展そのものが生産の膨大な増加、したがって国民所得の増加をよび、実質賃金の上昇、大衆の生活様式の向上を可能にさせた……飢に苦しむみじめなあのプロレタリアートといったものは、それが1848年の現実ではあったにしても、1世紀後、科学技術の進歩によって、技術者、専門化した労働者、事務職員などが、工場生産の場において旧来の未熟練労働者にとって代わるにおよんでは、もはや神話 (un mythe)<sup>55)</sup>」にしかすぎなかったことが明らかになる。だから弁証法的“歴史主義”の予言は事実と一致しない。いいかえると、唯物史観は誤りを犯しているといえる。われわれは唯物史観が“事実”の面からみても誤ったものであることを認めざるをえない。

#### IV. 唯物史観より人口史観へ

唯物史観が歴史観としては“誤まった”歴史観であることは、すでに繰り返し述べた。ではなぜマルクスもエンゲルスもこういう誤りを犯したのか。それは彼らが“人口”を見落しているからである。南先生は“唯物史

観の誤りは人口を見落していることである”といわれたが——ここでわれわれは唯物史観を去って人口史観を構想してみる必要がある。前後の関係をもういちど整理していうと——マルクスが1883年に没してから、その盟友のエンゲルスはなお12年間もあとに生きのびて、この間に、いわばマルクスの“遺言執行人”として多忙なる日々を送った。マルクスが没した年の翌1884年に、そのエンゲルスがまず単独で発表したのは彼の著作《家族・私有財産および国家の起原》であったが、その序文で彼はこう述べた。“唯物論的見解によれば、歴史における究極の決定的要素は直接的な生（レーベン）の生産および再生産である。これはしかし、それ自身また2種に分れる。1は生活資料すなわち食・衣・住の諸対象ならびにそれに必要な諸道具の生産、他は人間それ自身の生産すなわち種の繁殖である。……”「——これは彼らの学説のほんの入口を掲げたものに過ぎないが、そこには明白に、物的な生活手段とは別の、人間種族の繁殖が語られている。これは一体“一元論”としての史観のすがたを著しくこわすものではなかろうか。エンゲルスは、マルクスの没してのち、単独にこのような、いわば多元的な史観、あるいはその拡張解釈を述べたのであろうか、というのがわたし〔南〕のまず抱いた疑点であった。そのために。わたし〔南〕は、彼ら兩人の関係諸文献を検索した。どこにも彼らは“他人の生産”——種族の繁殖とか人口とかを説いてはいない」——と南先生が述べておられるように、<sup>56)</sup>マルクスもエンゲルスも“人口”を忘れ去って“兩人の関係諸文献を検索”しても“人口”はとりあげられていない。マルクスの周知の『経済学批判』の序文のなかにも“人口”は見られない。★

★ 老カウツキーがこれについて下す次の奇妙な推定である。彼は当時まだ『ドイツ・イデオロギー』の全巻を知ってはいなかったが、やっとリヤザノフによって発表された第1部に生産概念の2重性あることを見、彼一流の臆測を加えて次のとおりいう“ここで甚だ奇怪なことは、この期間内に（『ドイツ・イデ

オロギー』からエンゲルスの『起原』にいたるまでの40年間) マルクスもエンゲルスも、かつて1度も他の場所で生の生産のこの2重性を指摘しなかったということである。この思想は甚だ重要なものであるから、それが述べられないままになってしまったはずがない。われわれはこう推定する。この思想は少くともわれわれの先師たちの意識のうちで強く隠されていたもので、それがモルガンの評論によって初めて新たな力を得てきたものであると。“一口でいえば、マルクスは生涯、そしてエンゲルスはモルガンの『古代社会』を手にした晩年の頃まで、その青年期にみずから表現しておいた重要な思想を忘れていた、というのだ。こんなことは一体、あり得るだろうか?——と南先生は書いておられる。(『人口理論と人口問題』昭和10年、千倉書房、78～9ページをみよ)

——とすると、ここに問題がでてくる。“人口”を歴史の究極の動因と考える歴史観は果して考えられないものかどうか。そもそも1つの社会から他の社会への歴史的発展に対して、人口はいったいどういう役割をもつのか——という問題が出てくる。

さて、“人口”というと、人は直ちにロバート・マルサスを連想する。いうまでもなくマルサスは人口原理の確立者であるからである。

周知のごとくマルサスの人口理論は2つの原理をもつ。1つは規制作用に関する原理、もう1つは増殖傾向に関する原理であるが、じつは、マルサスは増殖傾向に関する原理を重視して「マルサス自身は後者〔増殖傾向原理〕のみを“人口原理”と呼んだ<sup>57)</sup>」のである。ということは、マルサスの原理をpassiveなものとして——つまり生活資料の生産がactiveで、人口増加はpassiveなものとして——考えることは、誤りであることを意味する。マルサスは「つねに増殖の傾向をコンスタント(恒存・不変)のものとみていた。増殖の傾向がコンスタントであればこそ、規制作用もコンスタントであり、かくて人口は進転と逆転との波動を周期的にくり返すにいたる<sup>58)</sup>」のであって、「マルサスの歴史的記述は、かくて、あらゆる民族

があらゆる時代にわたって過剰人口現象を呈していたことの証明であり、1つの恒存現象としての過剰人口の説明であったと見る<sup>59)</sup>ことができるのである。まことに“神は男女を養い得るよりも速かに彼らをつくり出す”(God makes men and women faster than He can feed them)というサウジー (Southey) の金言の示すとおりである。<sup>60)</sup>したがって、“人間社会には1つの原則があり、それによって人口は永久に生活資料の水準にまで抑止される”(population is perpetually kept down to the level of the means of subsistence) というマルサスの原理を——生活資料の生産がactiveで人口はpassiveだというふうに——考えることは誤りである。マルサスは増殖傾向原理のみを人口原理としているのである。

繰り返していうが「マルサスにおいては人口は原理的に2つの面で捉えられており、人口は生存資料によって制限されるという消極面から“規制原理”が成り立ち、また人口は絶えずこの生存資料を超えて増殖せんとする傾向があるという積極面から“増殖原理”が成り立つのであった。マルサス自身はこの後者〔のみ〕を“人口原理”と呼んでいたが……人口の不断の増殖傾向が人間を駆って勤勉に立ち向わしめ、あらゆる社会的進歩に対する最強の要因として作用するということは、初版当時からマルサスの明瞭に認め、かつ強く主張していたところ<sup>61)</sup>」なのである。サー・ジェイムズ・ステュアート (Sir James Steuart 1712~1780) は『経済学原理の研究』(1767) の第1篇、第3章で「すべての動物の、したがって人間の増殖の基本原理はまず生殖 (generation) であり、つぎに食物であり、生殖は存在をあたえ、食物はこれを維持する<sup>62)</sup>」ものと述べたが、つまり人口の歴史を論ずる場合には、“生殖”が基本原理であり、次が食料 (生存資料) という順であった。

すでに述べたようにボグダーノフなどは、1つの社会段階から次の社会段階へ移行する場合の歴史発展の動力を人口に認めている。★

★ ボグダーノフは、社会発展を3つの段階に分けた。1)自然自足社会 Natural Self-Sufficing Society 2)商業社会 Commercial Society 3)社会的に組織された社会 Socially organised Societyの3つである。しかもこれらの社会について、その社会発展の歴史的原動力は人口増加であるという。

要するに、“人口”は決して生活資料によって規制されるようなpassiveなものでなく——歴史発展の起動力となるようなactiveなものだということである。マルサスの増殖原理は、もっぱら出生の側に、生殖の側に樹立された普遍原理であり、人口の増殖傾向が“恒存量”(a given quantity)と考えられたのも、じつは人口増殖の根底に、同じく“恒存量”としての性愛が認められていたのであり——こう考えると1つの自然科学的法則として、科学的歴史観をなすものであった。つまり“人間の繁殖力”というものは——放置すれば“納屋の鼠”(カンティヨン)のごとく、“水蝗”(フランクリン)のごとく、増殖せんとする傾向をもち、“人間の全歴史的発展に対して最根本的最強力な作因”(リューメリン)をなすものであり、“人間の1回の射精がアメリカ合衆国の全人口を産み出すに足る以上の精虫を包含”(エニード・チャールス)しているものなのである。

マルサスが初版『人口論』において、<sup>63)</sup>可能的な増加力として、人口は幾何的比例で食物は算術的比例で増加する(現実の増加力ではなく)と述べたのは、人間増加が食糧生産よりも優先しているぞ——という思想が根底にあればこそ、こういう表現をとったものなのである。「あらゆる生物はその種属を生殖するものである。生殖は明らかに1つの必然なのだ(Reproduction is clearly a necessity)」——とすれば、歴史発展の究極の動力を“人口”に認めようとする人口史観は十分に構想されて然るべきものであり、しかもマルサスの歴史観のうえに構築できる。

しかも、繰返し述べたように、唯物史観は歴史学的には誤まった歴史観であり、“歴史的構成のもろさ”(トレルチ)をもつものであった。



現在世界人口は約48億であり、しかもその78%は低開発諸国の人びとから成りたつ。もし、歴史発展の究極の動因を生活資料の生産（さきに述べた『ドイツ・イデオロギー』の定式化）とすると説明がつかなくなってしまうだろうか。

やはり、種の増殖（人口増加）を歴史の究極の動因と考えるべきではないか。

筆者はここで人口史観を改めて提唱する。われわれは唯物史観の誤りは人口を見落していることであることを知った。いまや筆者は“唯物史観より人口史観へ”という新たなテーゼを提唱する。

ではなぜ唯物史観のような“歴史構成のもろさ”をもった未消化な史観が生れたのかが問題となろう。次章以下では、この問題を追求する。

- 注 1) E. H. Carr, *What is History?*, Penguin Books, 1961, p.30.  
2) R. G. Collingwood, *The Idea of History*, edited by T. M. Knox, Oxford University Press, 1978 (first 1946) p.226.  
3) *ibid.*, p.18.  
4) A. Stern, *Philosophy of History and the Problem of Values*, Mouton & Co's-Gravenhage, 1962, p.12.  
5) B. Croce, *Zur Theorie und Geschichte der Historiographie*, Verlag von J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen, 1915, SS. 2~3.  
6) 南 亮三郎『人口論五十年の後』千倉書房, 昭和55年, 52ページ。  
7) 林 健太郎『史学概論』有斐閣, 昭和50年, 17ページ。  
8) E. Bernheim, *Einleitung in die Geschichtswissenschaft*, Walter de Gruhter & Co. 1926, S.5.  
9) *ibid.*, SS.7~11.  
10) 林 健太郎『史学概論』前掲書, 15ページ。  
11) G. Ritter, *Zur Problematik gegenwärtigen Geschichtsschreibung*. 岸田達也邦訳, 創文社, 昭和55年, 20ページ。  
12) 南 亮三郎『人口論五十年の後』千倉書房, 昭和55年, 65ページ。  
13) H. Cunow, *Die Marxsche Geschichts-Gesellschafts-und Staats theorie*, Vierte Auflage, II Band, Verlag von J. H. W. Dietz Nachf, 1923, Berlin, S.141.

- 14) 南 亮三郎『人口論六十年』千倉書房，昭和59年，16～7 ページ。
- 15) 林 健太郎，前掲書，100ページ。
- 16) 同書 106ページ。
- 17) 同書 106ページ。
- 18) 同書 113ページ。
- 19) B. Croce, *Historical Materialism and the Economics of Karl Marx*, Geoge Allen & Unwin LTD, 1922, p.91.
- 20) *ibid.*, p.86.
- 21) 大類 伸『史学概論』昭和16年，共立社，91ページ。
- 22) R. G. Collingwood, *The Idea of History*, op. cit., p.220
- 23) A. Toynbee, *A study of History*, Oxford University Press, Seventh Impression, 1956, Vol V, p.24.
- 24) E. Troeltsch, *Der Historismus und seine Probleme*, Erstes Buch, Das logische Problem der Geschichtsphilosophie, Tübingen, 1922.  
近藤晴彦邦訳「歴史主義とその諸問題」(上)(『トレルチ著作集』(4) ヨルダン社，1980，28～9 ページ所収)
- 25) 高坂正顯『歴史哲学序説』岩波書店，昭和18年，4 ページ。
- 26) A. Stern, *Philosophy of History and the Problem of Values*, op. cit., p.7.
- 27) R. G. Collingwood, *The Idea of History*, op. cit., p.1.
- 28) *ibid.*, p.1.
- 29) A. Stern, *Philosophy of History and the Problem of Values*, op. cit., p.55.
- 30) *ibid.*, p.56.
- 31) *ibid.*, p.57.
- 32) *ibid.*, p.57.
- 33) R. G. Collingwood, *The Idea of History*, op. cit., p.2.
- 34) D. Bell, *The End of Ideology*, The Free Press Paperback Edition, 1967, p.367.
- 35) *ibid.*, p.370.
- 36) 南 亮三郎『人口論五十年の後』前掲書，70～2 ページ。
- 37) 同書 73ページ。
- 38) 同書 67ページ。
- 39) 山内 昶「未開社会と史的唯物論」(上)(『思想』1982年，5. 岩波書店，160ページ所収)
- 40) 前掲論文 180ページ。
- 41) 同 159ページ。
- 42) Bogdanoff, *A Short Course of Economic Science*, transl. by

- Fineberg. rev. ed. London, 1925, p.26. 林 房雄, 木村泰一訳, 改造文庫, 49ページ。
- 43) A. Stern, *Philosophy of History and the Problem of Values*, op. cit., p.139.
- 44) *ibid.*, p.139.
- 45) *ibid.*, p.139.
- 46) Collingwood, *The Idea of History*, op. cit., P.26.
- 47) A. Stern, *Philosophy of History and the Problem of Values*, op. cit., p.142.
- 48) *ibid.*, p.143.
- 49) *ibid.*, p.143.
- 50) K. Vorländer, *Von Machiavelli bis Lenin*, Neuzeitliche Staats und Gesellschaftstheorien, Verlag von Quelle & Meyer in Leipzig, 1926. 宮田光雄監訳, 創文社, 147ページ。
- 51) A. Stern, *Philosophy of History and the Problem of Values*, op. cit., p.146.
- 52) C. Antoni, *L'Historisme*, Lebrairie Droz, 1963, p.9.
- 53) *ibid.*, p.74.
- 54) K. R. Popper, *The Poverty of Historicism*, Routledge & Kegan Paul, 1961. p.45.
- 55) C. Antoni, *L'Historisme*, op. cit., p.109.
- 56) 南 亮三郎『人口論五十年の後』前掲書, 62～3 ページ。
- 57) 南 亮三郎『人口理論と人口問題』千倉書房, 昭和10年, 189ページ。
- 58) 同書 239ページ。
- 59) 同書 256ページ。
- 60) J. Bonar, *Malthus and his Work*, Frank Cass & Co. LTD. 1966, p.4.
- 61) 南 亮三郎『人口原理の研究』千倉書房, 昭和18年, 222～3 ページ。
- 62) Sir. J. Steuart, *An Inquiry into the Principles of Political Economy*, Augustus. M. Kelley Publishers, Reprint, 1967. p.25.
- 63) A. M. Carr-Saunders, *The Population Problem*, Oxford University Press, 1922, p.38.